

リンゴ黒星病に対する「トリフミン水和剤」および「バイコラル水和剤」の使用法 (園試 環境部)

1. 背景とねらい

MBC耐性菌の出現以来、リンゴ黒星病に対する有効な防除薬剤は少なく、対応に苦慮していることから、その検索と並に、新規薬剤の中で2・3の有効と思われる剤を見出し、それらによる防除実証試験を行ってきた。今回そのうちのトリフミン水和剤とバイコラル水和剤が登録と取得したので、使用法について明らかにした。

2. 技術内容

- 1) 両薬剤ともに使用濃度は3,000倍とする。
- 2) 前年の多発園や開花期中に不順天候が予想され、多発するおそれのある場合には、開花期前および落花期の2回散布する。
- 3) 前年の少発園や未発園では、従来の防除薬剤で対応してよい。しかし発生の増加や拡大のおそれがある場合には、開花期前に両薬剤のいずれか1回散布する。

3. 指導上の留意事項

- 1) 両薬剤とも既登録のバイレトン水和剤およびサプロール水和剤と同系統の薬剤なので、耐性菌の発現を回避するために、これら4薬剤をあわせた総使用回数と2回とする。
- 2) 両薬剤とも感染後に散布しても孢子形成を抑制する、いわゆる治療効果がある。しかし発病が増加してからの使用では、従来の防除薬剤よりも効果は優るものの、十分な効果は得られないので、開花期前後の使用を基本とし、予防的に散布する。
- 3) 他病害に対する防除効果は、トリフミン水和剤がうどんこ病と赤星病に、バイコラル水和剤が赤星病にそれぞれ有効で、同時防除が可能である。なお斑葉落葉病に対しては、両薬剤とも発生初期であれば防除効果が認められる。

4. 参考文献・資料

- 1) 昭和57~61年度 岩手園試「園芸作物の病害虫に関する試験成績」
- 2) 昭和60年度 秋田果試業務報告 p.161
- 3) 昭和55・57年度 リンゴ農薬連絡試験成績書

5. 試験成績

表-1 リンゴ黒星病に対する防除効果 (60年度試験)

供試薬剤	調査葉数	発病葉率	発病果率
トリフミン水和剤 3000倍	600	19.0%	6.8%
バイコラル水和剤 2500倍	600	9.1	4.0
オーソサイド水和剤 800倍	600	42.1	2.2
無散布	600	75.8	50.3

表-2 リンゴ黒星病に対する防除効果 (61年度試験)

供試薬剤		調査葉数	発病葉数	発病葉率
トリフミン水和剤	2000倍	600	5.5	0.9%
トリフミン水和剤	3000倍	600	8.0	1.4
バイコラール水和剤	2500倍	600	9.5	1.6
サプロール水和剤	500倍	600	66.5	11.1
ダイホルタン水和剤	1500倍	600	14.5	2.4
オーソサイド水和剤	800倍	600	59.5	10.0
無散布	—	600	366.0	61.0

表-3 散布時期別発病調査

トリフミン散布時期			6/12		6/23		7/1		7/17	
開花直前	落花期	7月上旬	A	B	A	B	A	B	A	B
○	—	○	3.3	0.4	21.3	2.5	25.3	2.9	38.0	4.2
—	○	○	12.0	1.9	16.0	2.0	24.0	2.9	32.7	3.8
○	○	—	1.3	0.1	2.0	0.2	16.0	1.6	22.0	1.9
○	○	○	2.2	0.3	4.7	0.5	16.1	1.5	21.0	2.0
無散布区										61.0

A: 発病新梢率 (%)

B: 発病葉率 (%)

表-4 散布時期別発病調査

バイコラール散布時期			一樹当り発病新梢数			発病果数
開花直前	落花期	落花10日後	6/6	6/16	7/2	7/2
○	—	—	5.3	25.0	30.1	3.7
—	○	○	25.3	39.6	55.3	10.6
○	○	—	6.6	10.4	26.9	5.8
—	—	—	21.4	39.3	75.0	13.0